英文IR人材育成講座プログラム

# IR　期待されている英文開示と課題

## ～　日本企業、特にスタートアップ企業の グローバル株式市場でのプレゼンス（認知度）を高めるために　～

2023年5月25日

ジェイ・ユーラス・アイアール株式会社

岩田　宜子

ご参考：

http://www.j-eurusir.com　（J-Eurusウェブサイト）

# 本日の内容

1. はじめに
2. 株式市場におけるIRの位置づけ
3. IRの実務におけるポイント
4. 投資家との建設的な対話（エンゲージメント）に向けて

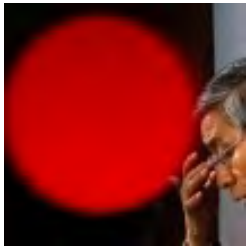
（ご参考）弊社概要と略歴

All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

# 1. はじめに

J-Eurus IR Co., Ltd. © All Rights Reserved

# エコノミスト誌から日本に関係するイラスト①



二つのコードの評価は・・？

SESSOKU??
「拙速は巧遅に優る」というが・・・・

出典：全て、The Economistより

All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

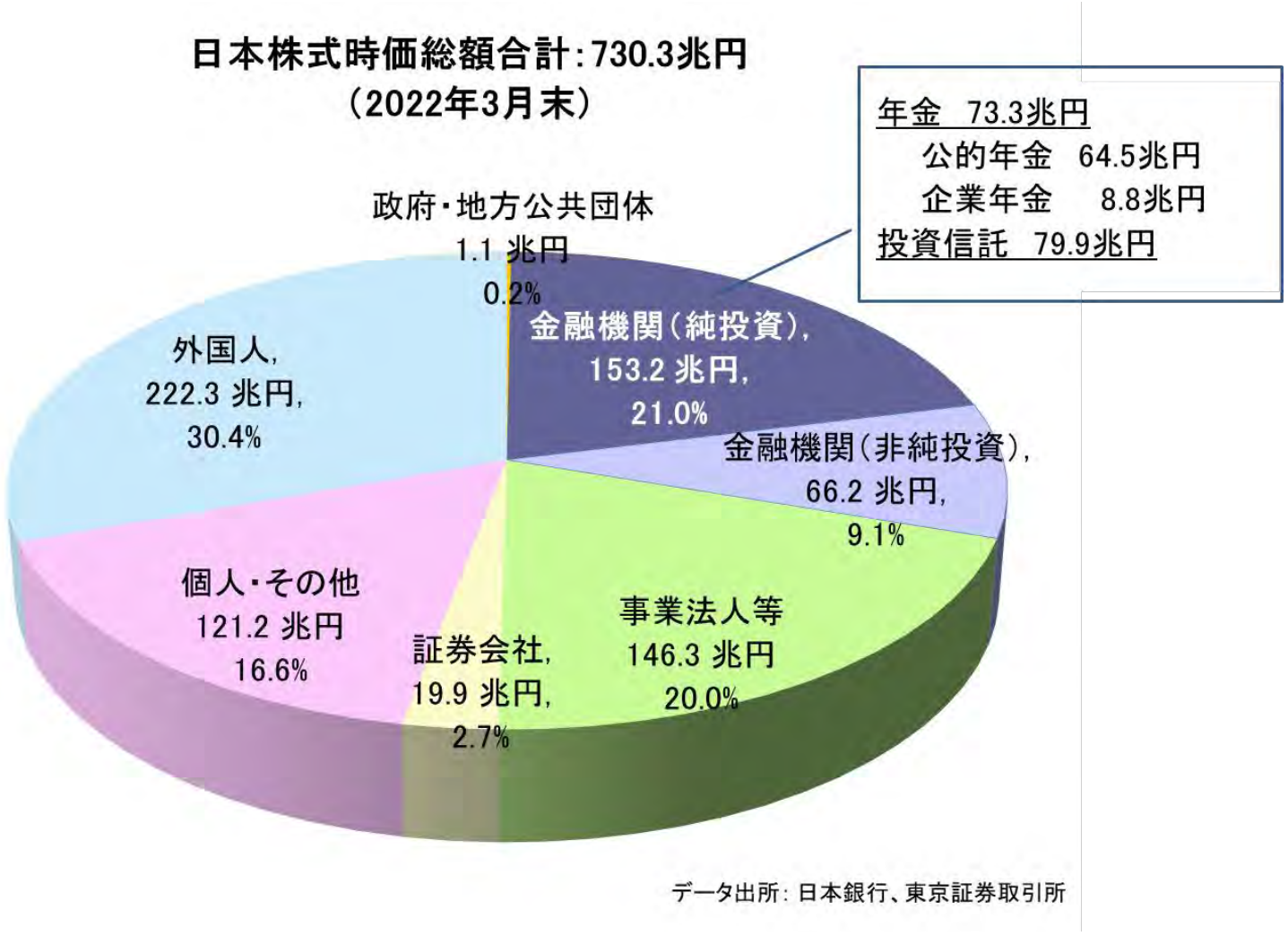
# エコノミスト誌から日本に関係するイラスト②

← 桜の花の如く？公共部門におけるデジタル宣言（2001年時の2003年目標と同じ・・・・・？？？）

All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

# 日本企業の株主構成 （1）

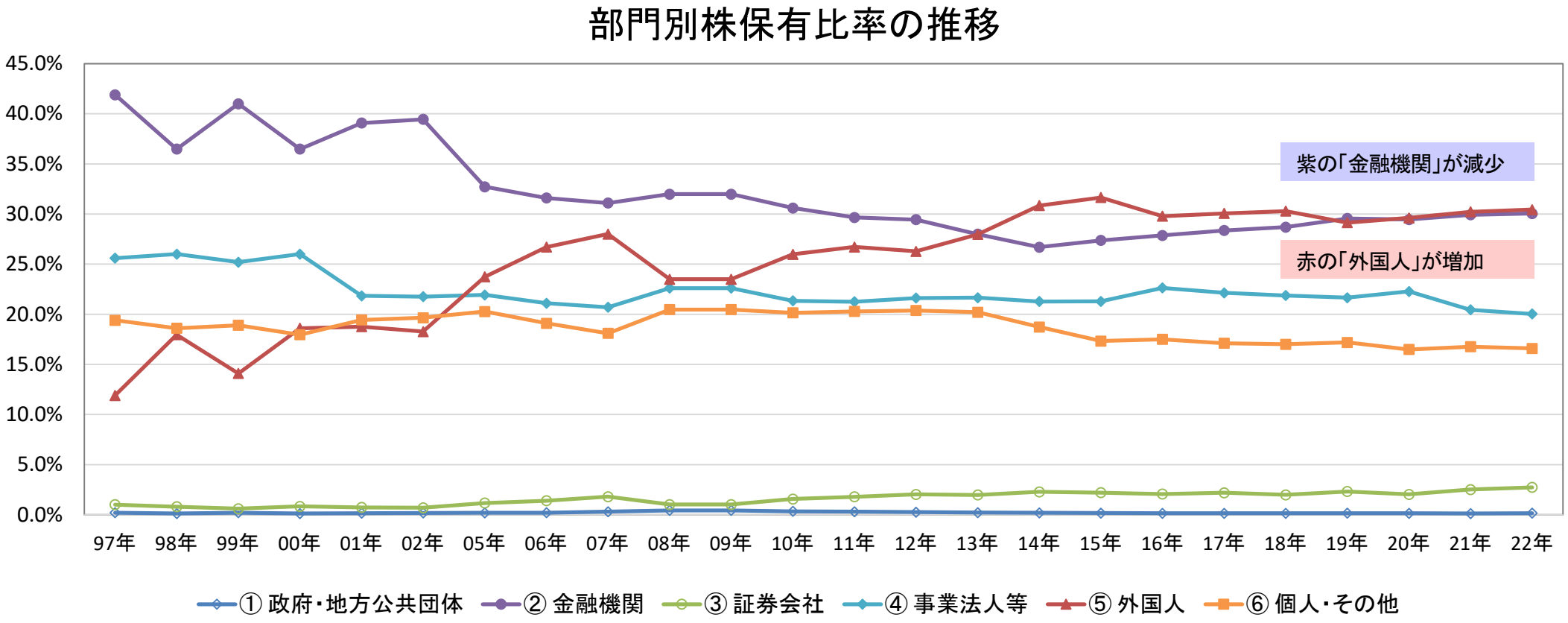
## 海外投資家の保有額は国内機関投資家の純投資保有額を大きく上回る




All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

データ出所：
日本銀行「資金循環」2022年3月（速報値）
日本証券取引所「2021年度株式分布状況調査の調査結果について」

# 日本企業の株主構成 （2）




データ出所：東京証券取引所

All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

# 日本企業が、現在、直面している四つの問題点

## ①陳腐な経営・戦略への失望　1

**日本企業の経営トップは「無能」というのが世界の定説になってきた？！**

## ②陳腐な経営・戦略への失望　2

**イノベーション力がないという定説をどう覆すか**

経営への支持を得るための
長期的な視点とその「対話」が
資本市場と出来ていない企業が多い

IRにおいてもイノベーション力が求められている

プライム市場
PBR＜1　問題

ここのところの活況
利用すべき！！

## ③株式市場の声が届かない

**証券会社の有力顧客の声しか企業に届かない**

**依然、企業に残る株式市場への偏見**

## ④IRと取締役会

**IR下手、アクティビストの活発化、**

**取締役会・ガバナンスへの理解の浅さ**

**エンゲージメントの問題**

All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

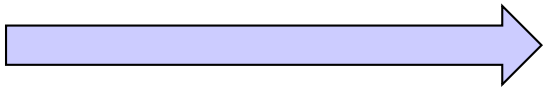
# 新型コロナウィルス感染拡大時における投資家のコメント

日本および日本企業にとって、これは、大きなチャンスである

- これまでできなかった「変革」へのきっかけとなるだろう
  - ITの浸透
  - 古い「観念と生活スタイル」の一掃のチャンス

- 経営へ「多様的な」発想が、マスト。これこそが、さまざまな困難を排斥、将来リスクを縮小する解決策である。 ← これまでの画一的な進め方を見直す良い機会
  - 通勤地獄がなくなる
  - これまで働くことができなった人達の参加

- 企業側も、上記による「変化」の情報発信・アピールが必要



**イノベーションを生む力に**

**といくはず・・・・**

All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

# 2. 株式市場におけるIRの位置づけ

J-Eurus IR Co., Ltd. © All Rights Reserved

# そもそも、IR（インベスター・リレーションズ）とは

企業が株主や投資家に対し、投資判断に必要な情報を適時、公平、継続して提供する活動全般であり、一時的に株価を上げる為の活動ではない。

- IR活動を実践する企業は、制度的開示以上に、自主的に情報開示をすることが大切。
- 資本市場での正当評価を得るため、投資関係者と意見交換し、理解を深め、信頼関係を構築。

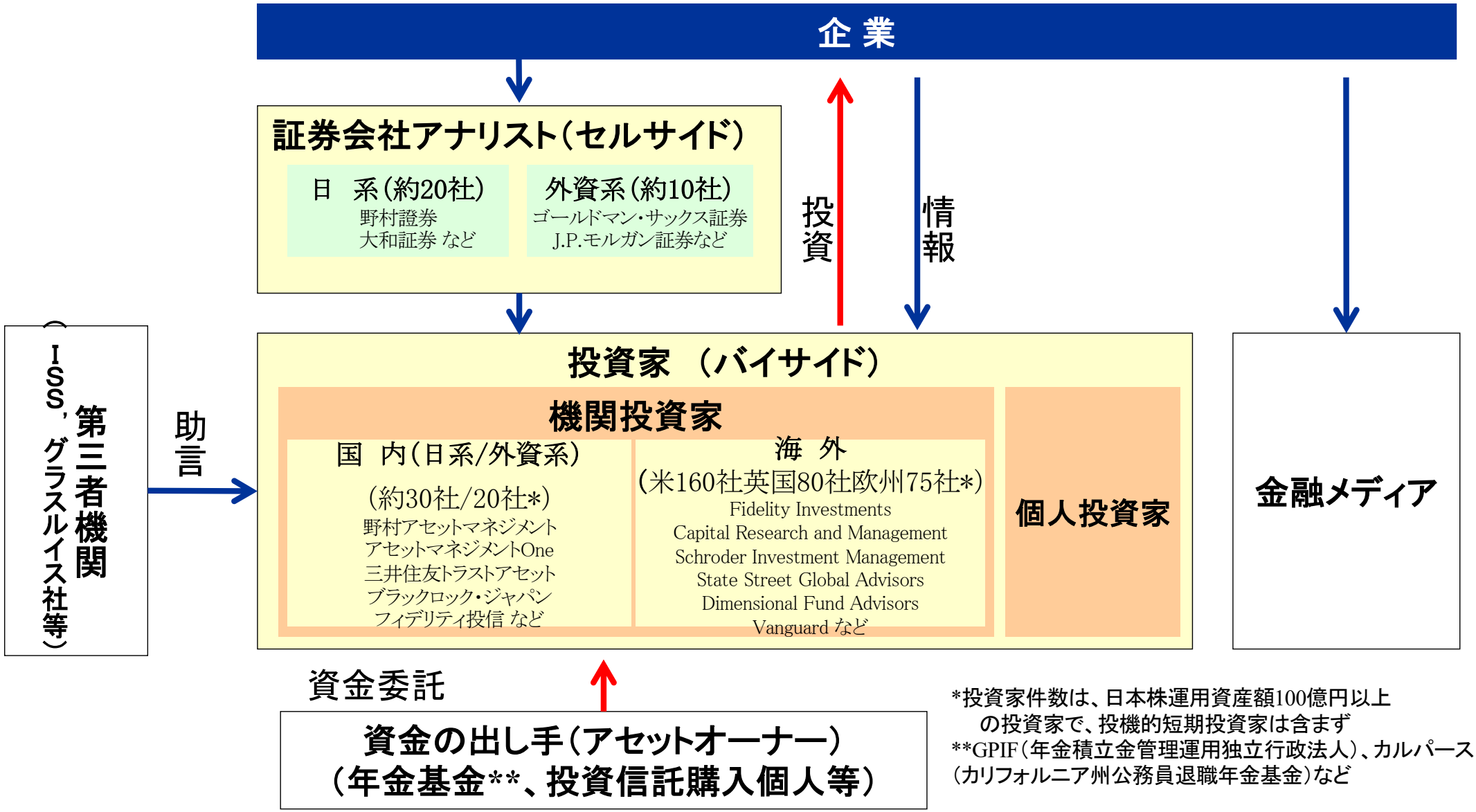
別の言い方をすると・・・

経営者・企業経営戦略と資本市場との戦い
戦いの武器は→“理”

“理” ⇔ “情”

All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

# 企業と機関投資家の位置付け




*投資家件数は、日本株運用資産額100億円以上の投資家で、投機的短期投資家は含まず
**GPIF（年金積立金管理運用独立行政法人）、カルパース（カリフォルニア州公務員退職年金基金）など

All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

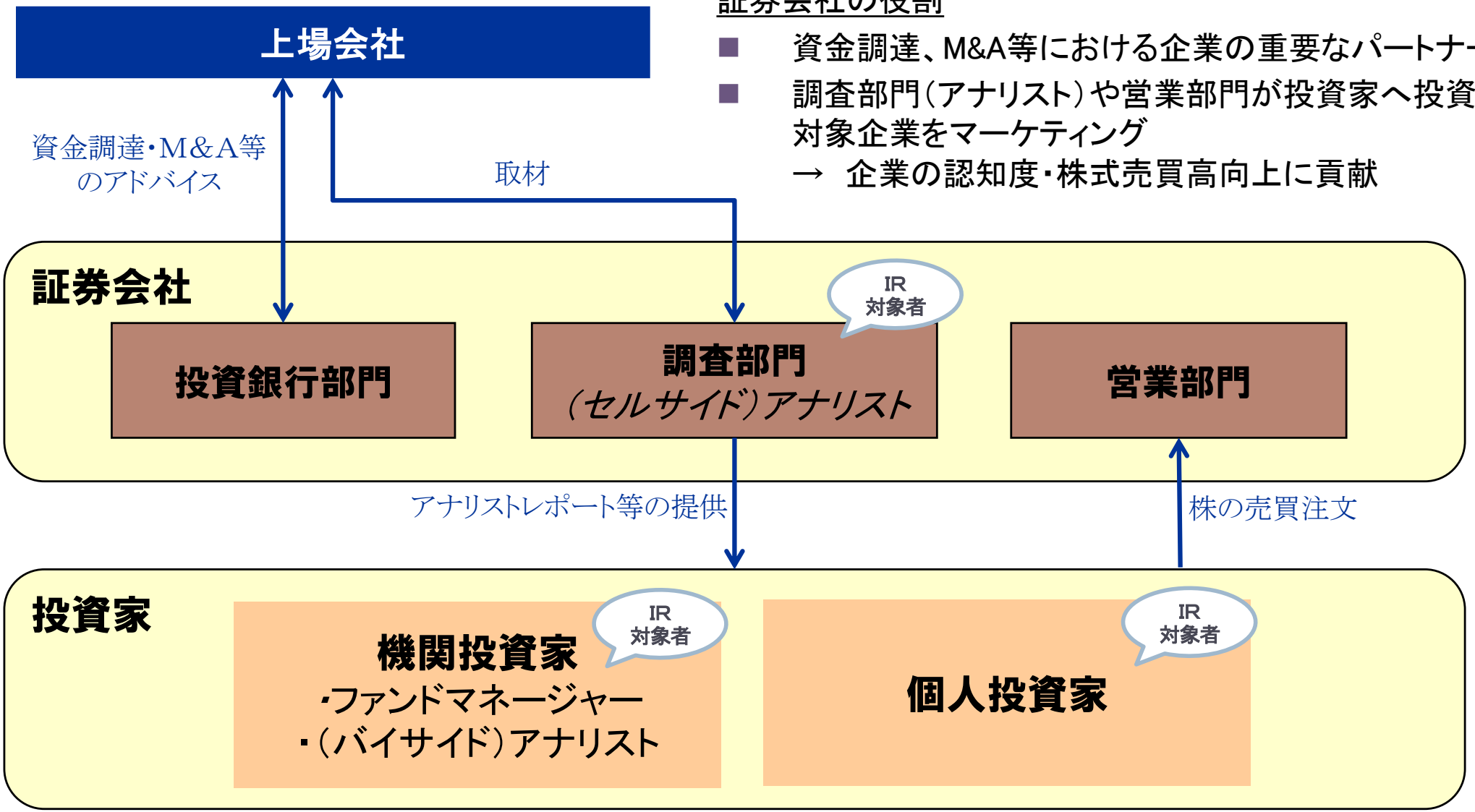
# 機関投資家と証券会社アナリスト

論理的思考を持つ洗練されたプロフェッショナルグループ
明確な目的を持つ

- **機関投資家 （バイサイド）**
  - ファンドマネージャー
  - バイサイドアナリスト
- **証券会社アナリスト （セルサイド）**
  - セルサイドアナリスト

All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

# 証券会社の役割




証券会社の役割

- 資金調達、M&A等における企業の重要なパートナー
- 調査部門(アナリスト)や営業部門が投資家へ投資対象企業をマーケティング
  → 企業の認知度・株式売買高向上に貢献

All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

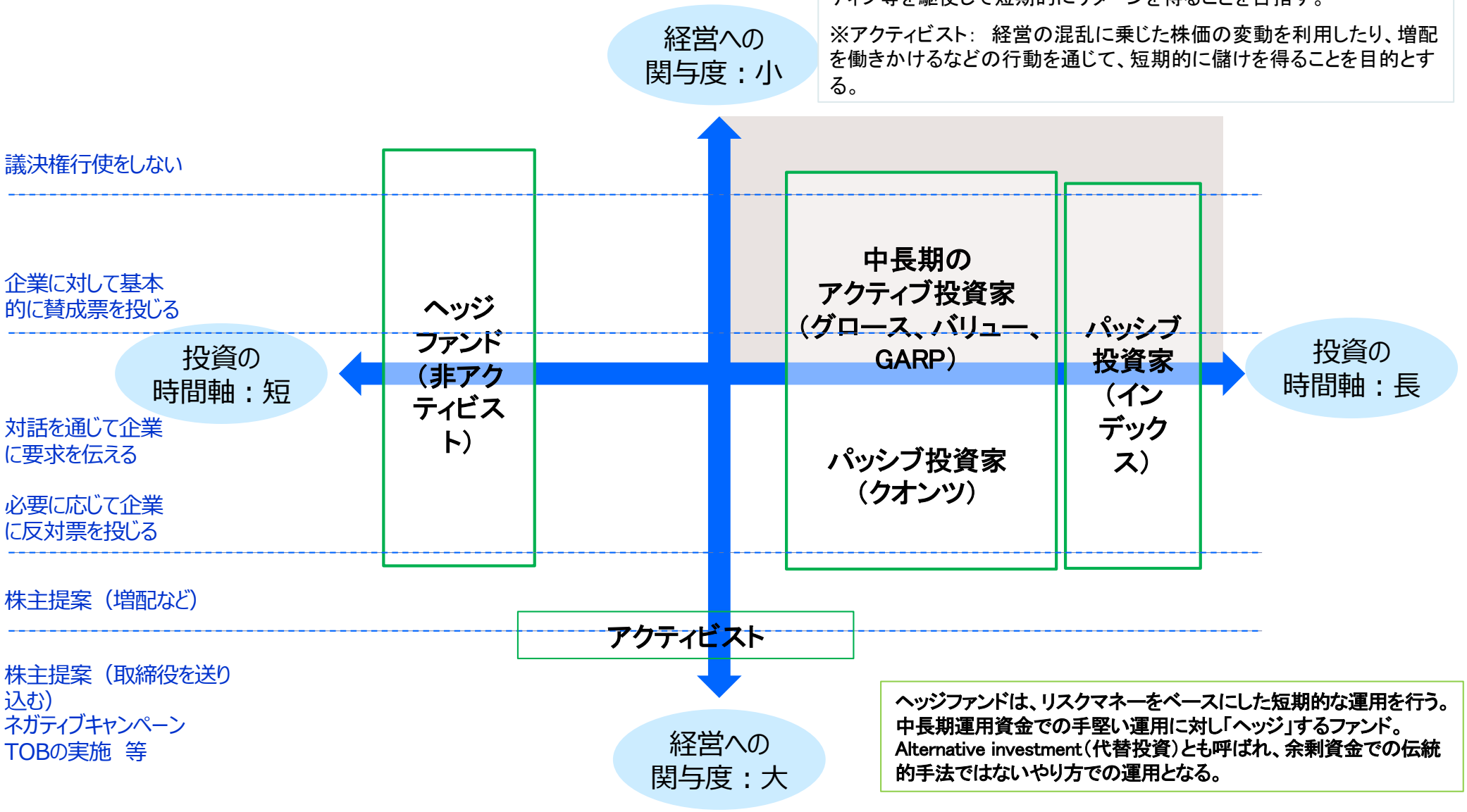
# ターゲティング
# 機関投資家の運用スタイル

アクティブ投資家

※中長期の投資家： 中長期的な保有を通じて市場平均を上回る運用成績を上げることを目標とする。

※ヘッジファンド： 現物株に投資する伝統的な手法は用いず、デリバティブ等を駆使して短期的にリターンを得ることを目指す。

※アクティビスト： 経営の混乱に乗じた株価の変動を利用したり、増配を働きかけるなどの行動を通じて、短期的に儲けを得ることを目的とする。




ヘッジファンドは、リスクマネーをベースにした短期的な運用を行う。中長期運用資金での手堅い運用に対し「ヘッジ」するファンド。Alternative investment（代替投資）とも呼ばれ、余剰資金での伝統的手法ではないやり方での運用となる。

All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

# 投資家が重視するファクターの分析

| | | |
|---|---|---|
| キャピタルゲイン | 割安性 | 資本効率の改善 |
| | | 業務効率の改善 |
| | | 市場の評価の低さ解消 |
| | 成長性 | セクター・マーケットの成長性 |
| | | 会社独自の成長性 |
| | 短期の値動き（イベント性） | |
| インカムゲイン（配当利回り） | 配当水準 | 配当性向 |
| | | 増配期待 |
| | 前提としての安定性 | |

企業は、上記を意識してIR活動を展開する。企業がどのような情報を発信したらよいかを考える。

企業経営

＋　ガバナンス、ES

All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

# 海外投資家の日本株リサーチ体制

- **海外投資家の日本株リサーチ体制は、投資家によって様々**
  - 国内・海外に拠点が存在
    - 海外の拠点にアナリスト・ファンドマネージャーが在籍している
    - 日本にアナリスト・ファンドマネージャーが在籍している
    - アジアの拠点にアナリスト・ファンドマネージャーが在籍し、他の海外拠点に対しても情報提供をしている
    - 上記のような日本株リサーチ拠点以外に、他の海外拠点のグローバル株式運用部において日本株の組入れがある
  - 日本に運用担当者を置いている投資家は、日本株運用を行なっている主要な海外投資家300社程度のうち20社程度
- **海外の拠点における日本株に対する認知状況**
  - 個別銘柄に対する理解は、日本拠点よりも低くなりがち
  - 日本においては知名度の高い消費財メーカー等でも、企業側からのコンタクトがなければ「全く知らない」ということも多い
- **日本株というカテゴリーではなくグローバル株**
  - グローバル株式、専門・特殊セクター株式（例：医薬品ベンチャー、不動産ファンド、スタートアップ企業等）

**海外拠点の投資家に対しては、**
**企業側からの積極的なアプローチが必要**

All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

# 3.　IRの実務におけるポイント

J-Eurus IR Co., Ltd. © All Rights Reserved

# 何のためのIR活動か

企業経営にとって望ましい株主とは

- 経営陣と時間軸が近い
- 経営陣に対する信頼感がある
- 経営方針を基本的に支持している

IR活動の目的は

貴社の中長期の経営方針・戦略を正しく理解する投資家
貴社の経営を支持する投資家
安定的かつ中長期に保有する投資家
⇒ これら「望ましい株主層」を増やすこと、ではないだろうか

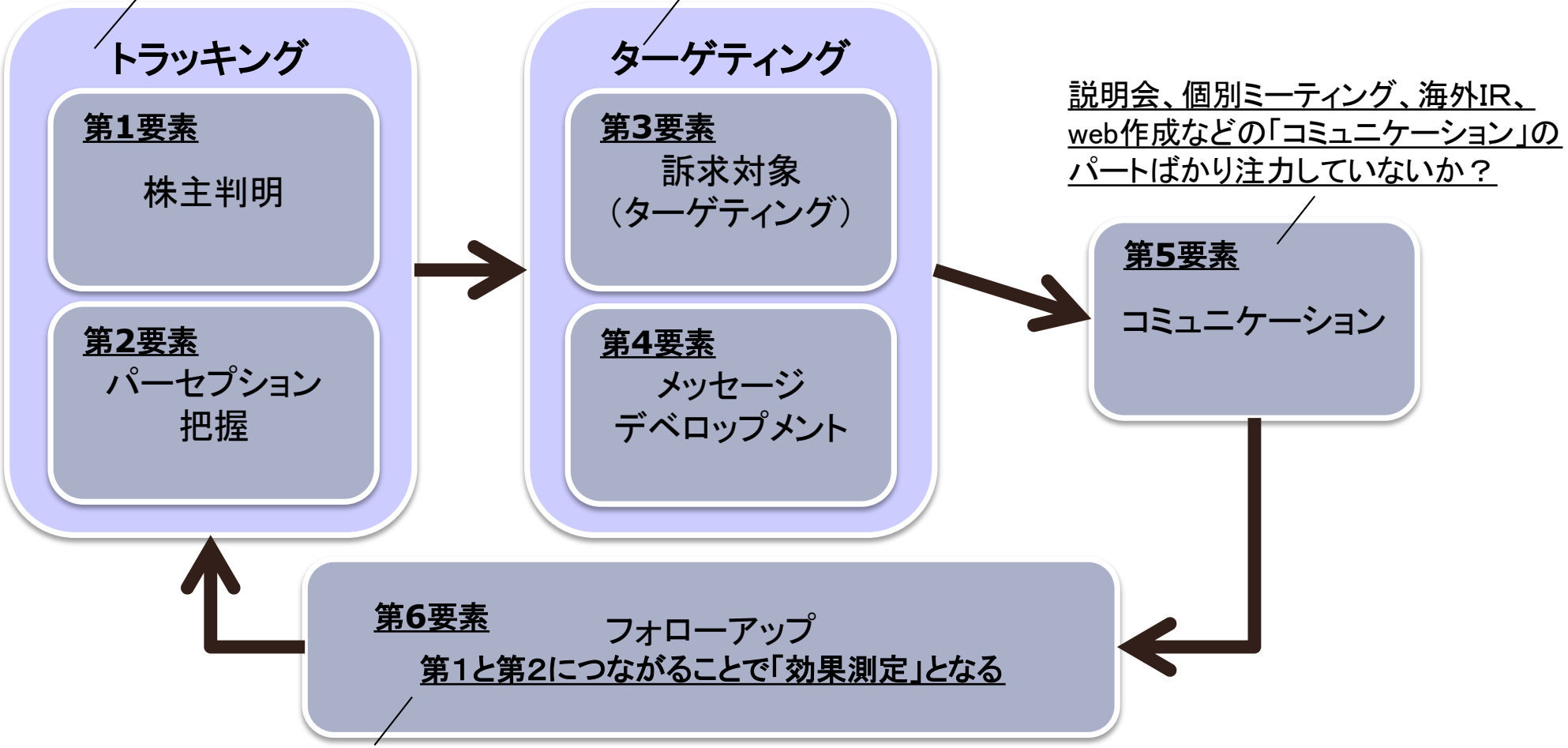
そのような投資家はどこにいるのだろうか？？

All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

# IRの効率性・成果を上げるための6要素

どの投資家が、どのような評価軸で保有しているのか（あるいはしていないのか）？

誰に、どのようなメッセージを発信するのか？（八方美人はやめよう）




投資家・アナリストの判断（売買・推奨）とその理由を把握し、今後のメッセージ・デベロップメント材料とする

All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

# メッセージの構築とは
# 投資家（機関投資家）が企業に対して着目するところ

その企業は、どうやって企業価値向上を目指しているか～成長していくのか
その具体的な着目点とは

- なぜ優位性があるのか（優位性はどこにあるのか）
- どうやって成長するのか
- なぜ利益を上げられるのか
- 短期的・長期的リスクは
- それを解決できる能力が経営者にあるか

上記を**能動的**に、発信する　→　期待される英文開示、英語のプレゼン

All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

# 海外投資家の特徴

| | 企業に求める情報 | 運用スタンス | 企業の認知 |
|---|---|---|---|
| 海外投資家 | ● 事業戦略、資本戦略や、マーケットの動きに対する会社の対応など、**比較的大局的な情報を求める傾向が**強い<br>● パーパス、マテリアルティなどの言葉が流行する前よりそれにそった質問や、経営者の姿勢を問うことが多い<br><br>**☆ 海外IRを評価する経営トップは多い** | ● ヘッジファンド*などの短期指向の投資家は国内よりも多い<br>● ただし、**中長期での保有を中心とする投資家**の運用資産が大部分である | ● 日本企業を幅広くカバーする投資家もいれば、グローバル株式運用の中でごく一部の日本企業のみをカバーする投資家もいる<br>● したがって、国内機関投資家に比べ、企業からの**能動的なアプローチが必要** |
| 国内投資家 | ● 経営の方向性に加えて、専門的な分析に必要な詳細な定量情報を求める傾向が強い<br>● セクターの中での相対感を重視 | ● 中長期での保有を中心とする投資家が、大部分の資金を運用している<br><br>**★ ただし、アセットオーナーによる四半期ごとのチェック・報告が要請されてる** | ● 多くの投資家が日本企業を幅広くカバー |

ヘッジファンド：株式、債券、為替などに対してデリバティブによる取引等を行うことにより、高いリターンを追求する運用スタイル。様々なタイプがあるが、株式においては、イベントの発生予想から価格が下がりそうな銘柄について借株を用いて先に売りを入れ、下がった時点で買い戻し、運用の鞘を抜くロング・ショート戦略が有名。

All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

# 海外投資家からの質問事例（実際の個別面談より）

- 海外投資家の特徴として足元の数字の質問は少ない。企業に対する詳細な分析に基づき、長期的な考え方、マネジメントの意気込みを確認する質問が多い
- 企業には、パーパスや経営方針、ユニーク性、それらを支える体制などの説明を期待している
  - 創業一族が今でも経営されている会社は意外とある。長期的に見るとすごく業績が安定しているというケースが多い。社員のことや取引先のことを大事にしながら長期的な視点で経営をしている。それが結果的に、短期的には悪く見えることがあっても、長期的にはうまくいっているケースが圧倒的に多い。
  - 各セグメントで御社の強みをハイライトいただきたい。〇〇が差別化要因であることが理解できた。ここからは、御社の成長戦略、5年、10年先を見た時、どういう姿を目指されているのかをお話いただきたい。
  - 〇〇事業は、どういう点が魅力であるのか伺いたい。マージンが安定しているという認識はある。どのぐらいのROICを〇〇事業で期待することができるのか。〇〇事業の将来を考えた場合、どのような変化があると思うか。例えば生産量が大きくなるとか、新しい技術が今後出てくる可能性が高いとか、5年や7年先に何が変わりそうであるのかお考えを伺いたい。
  - プレゼン資料はESG・SDGsを中心に構成されており、それ自体がビジネスの真ん中に位置していることがわかる。これからの中期経営計画はこのようなテーマを核として進んでいくと理解できる。最近の傾向として、ESGアナリストと話をしているときに、注目されてきているのは、社員とのエンゲージメントである。従業員の能力を会社が引き出そうとしてくれて、会社に貢献できていると意識できているか。そういった意識の高い企業に投資・評価したいということである。SDGsの一つの取組みとして重要視されてきている。そういった取り組みは行っているか。

All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

## ご参考）グローバルにおける二大投資家の一つ

# Fidelity Investments

【会社概要】

- 1946年にエドワード・C・ジョンソン2世により米国ボストンに設立。世界の主要なマーケットにおいて個人投資家から機関投資家まで幅広いニーズに対応した資産運用サービスを提供する、世界最大の独立系投資信託運用グループである。
- 日本では、1969年に外資系運用会社による初の日本拠点を開設。現在では、海外顧客の日本株式運用、日本の年金基金や機関投資家資金の運用、投資信託の設定・運用を手がけ、150社を超える金融機関を通じて幅広い運用サービスを提供している。
- **徹底した企業調査を通じて市場認識されていない企業価値を発掘することで、超過収益を得ることができるという哲学**を基本として、どの拠点においても企業訪問を中心とした個別企業に対する、**徹底的なファンダメンタルズ調査・分析に基づき銘柄を選択する、いわゆる「ボトム・アップ・アプローチ」運用哲学を50年以上にわたり一貫して実践している。**
- 調査においては、各分野に精通したアナリストが調査を行うだけでなく、その調査結果は、地域や資産クラスも超え、リアルタイムでグローバル全てのポートフォリオ・マネージャー、アナリストに共有される。

【主な運用スタイル】

- **グロース運用、GARP運用**

【主な日本株運用拠点】

- ボストン、東京

All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

## ご参考）グローバルにおける二大投資家の一つ

# Capital Research and Management Company

【会社概要】

- キャピタル・グループは、1931年に米国ロサンゼルスに設立されて以来、トロント、ロンドン、ジュネーブ、シドニー、東京、香港、シンガポール、ムンバイ等に広がるグローバルなリサーチ・ネットワークを駆使した独自の調査を通じ、資産運用に専念している。
- キャピタル・グループの**投資哲学は、「徹底した個別銘柄調査が長期にわたる優れた実績につながる」**というものである。**株価は、短期的には市場動向や投資家心理など様々な要因の影響を受けるが、中長期的にはファンダメンタルズを反映した適性価値に収斂していく、**いわゆるミスプライスの解消過程に収益を生む投資機会が存在するとの考えから、徹底した個別銘柄のファンダメンタルズ調査に基づく、ボトムアップ・アプローチを特徴とするバリュー・スタイル運用を行う。
- また、運用の一貫性、継続性を保持するため、一人の有能な人間にすべての銘柄選択を依存するスター・マネージャー・システムではなく、「マルチ・ファンド・マネージャー・システム」を採用している。これは、ファンドやポートフォリオの資産を複数のファンド・マネージャーに分割し、その持分については、個々のファンド・マネージャーが独自の投資判断を下すというシステムである。

【主な運用スタイル】

- **バリュー運用**

【主な日本株運用拠点】

- ロサンゼルス、ニューヨーク、サンフランシスコ、東京

All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

# 海外IRの実務

## ■ 海外IR当日までのおおよそのスケジュール

| 日程 | 実務内容 |
|---|---|
| 2か月前 | 海外IR実施確定後、通訳仮手配 |
| 1.5ケ月前 | ターゲティングリスト/案内状の準備 |
| 1ケ月前 | 海外機関投資家へのアプローチ開始<br>海外IRプレゼンテーション資料作成開始 |
| 1週間前 | 海外IRプレゼンテーション資料の送付 |
| 当日 | (欧州・米国・アジア)WEB／電話会議 |

## ■ 海外IR当日の進め方のポイント

| 流れ | ポイント |
|---|---|
| 冒頭<br>(IR部署) | 自社側の出席者紹介<br>投資家側の出席者確認 |
| 挨拶<br>(社長) | 「本日は○○について話をしたいと思っている」<br>**但し、理想は10分以内、QAの時間を多く取りたい**<br>進め方の確認 |
| プレゼン<br>(社長) | 目安として20分程度(通訳時間含む) |
| 質疑応答<br>(社長/IR部署) | 中長期的な観点で回答する<br>細かい質問は同席者(IR部署)が担う |
| 最後<br>(社長/IR部署) | 投資家に質問したいことを用意する<br>最後に伝えたいことを用意する |

ポイント： 企業自身で企業自身の名前で発信、アポ入れを。

All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

# 投資家、特に、海外投資家からは、
# より、中期的視点のメッセージが期待されている

足元の数字ではなく、中期的な企業経営に関するメッセージの構築

- 中期経営計画とその課題 （一貫したストーリーで）

- ESG（環境・社会・ガバナンス）、サステナビリティへの対応
  - ESG情報を、重要な投資手法の一つになってきている
  - ESG＝非財務情報→将来の財務情報、というように考える
  - 中長期における企業経営・戦略ストーリーの重要なテーマ
  - さらに、人的資本が主要なテーマになりつつある

中長期的なメッセージにより
中長期運用の投資家を株主にする

貴社経営の支持層を固めるための重要なテーマ

All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

# 4. 投資家との建設的な対話（エンゲージメント）に向けて

J-Eurus IR Co., Ltd. © All Rights Reserved

# 2021年　改訂コーポレートガバナンス･コード

【原則３－１．情報開示の充実】
上場会社は、法令に基づく開示を適切に行うことに加え、会社の意思決定の透明性・公正性を確保し、実効的なコーポレートガバナンスを実現するとの観点から、（本コードの各原則において開示を求めている事項のほか、）以下の事項について開示し、主体的な情報発信を行うべきである。

補充原則
３－１②　**上場会社は、自社の株主における海外投資家等の比率も踏まえ、合理的な範囲において、英語での情報の開示・提供を進めるべきである。**
特に、プライム市場上場会社は、開示書類のうち必要とされる情報について、英語での開示・提供を行うべきである。

※下線はJEにて追記

All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

# 2021年コーポレートガバナンス・コードと対話ガイドラインの改訂のポイント

| | 改訂（2021年）の概要 |
|---|---|
| ①取締役会の機能発揮 | • プライム市場上場企業において、**独立社外取締役を3分の1以上選任**（必要な場合には、**過半数の選任**の検討を慫慂）<br>• **経営戦略に照らして取締役会が備えるべきスキル（知識・経験・能力）**と、**各取締役のスキルとの対応関係の公表**<br>• 他社での経営経験を有する経営人材の独立社外取締役への選任<br>• **指名委員会・報酬委員会の設置**（プライム市場上場企業は、独立社外取締役を委員会の過半数選任を基本とする） |
| ②企業の中核人材における多様性の確保 | • **管理職における多様性の確保（女性・外国人・中途採用者の登用）**についての**考え方と測定可能な自主目標の設定**<br>• 多様性の確保に向けた**人材育成方針・社内環境整備方針**を**その実施状況**とあわせて**公表** |
| ③サステナビリティをめぐる課題への取組み | • サステナビリティについて**基本的な方針の策定**<br>• サステナビリティについての**取組みの開示**（特にプライム市場上場企業において、**ＴＣＦＤまたはそれと同等の国際的枠組みに基づく気候変動開示の質と量を充実）** |
| ④上記以外の主な課題 | • **【グループガバナンスのあり方】**<br>**プライム市場に上場する「子会社」**において、**独立社外取締役を過半数選任**または**利益相反管理のための委員会の設置**<br>• **【監査に対する信頼性の確保および内部統制・リスク管理】**<br>グループ全体を含めた**適切な内部統制や全社的リスク管理体制の構築やその運用状況の監督/内部監査部門**が**取締役会および監査役会等に対して**も適切に**直接報告を行う仕組みの構築**<br>• **【株主総会関係】**<br>プライム市場上場企業において、**議決権電子行使プラットフォームの利用と英文開示の促進**<br>• **【事業ポートフォリオの検討】**<br>取締役会で決定された**事業ポートフォリオに関する基本的な方針や見直しの状況の説明** |

All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

出典：商事法務No.2266 （2021.6.25）

# 企業と投資家の変化　サステナビリティに対する関心の高まり

- 企業におけるサステナビリティ（ESG要素を含む中長期的な持続可能性）に対する関心が高まる
- サステナビリティにおいては、リスクだけではなく、収益機会も重要視される
- 長期ビジョンや、同ビジョンにもとづく中期経営計画において、サステナビリティとの関係についてより明確化することが求められる

All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

# 海外IR～選ばれる「銘柄」になるには

日本企業に対して海外投資家によるコメント

- **日本企業は、問題意識を持っていない経営者が多いのではないか？次の3つパターンの経営者が多すぎる**
  **①グローバルの動きへの無知、②感情的、③（問題を）先送りする**

- 「勝つため」の視点で、IR活動もしないとだめ。経営者に的をはずれた回答をさせるなどは、IR担当者の怠慢である。また、臨機応変な対応も。

- ガバナンスの議論を、グローバルで勝つために、という認識にたって考えないのならばそれは愚かというのではないだろうか

- 日本語英語が見られることがある　例：中期経営計画は、a mid-term business plan と表示している企業が多い（mid-termとは一定期間の中間　a mid-term examination は学期の途中で行われる試験のこと。A medium-term business plan では？）

All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

# 長期ビジョン・経営計画について海外機関投資家から聞かれるキーワード

- 企業の経営理念が具体的な経営戦略として落とし込まれているか
- 長期的な企業価値向上をどう実現させるかという明確な道筋
- キャッシュの使い方をどうするのか。成長投資に向けるのか、株主に還元するのか
- 結果として利益率、ROEが現状より大きく伸びるというメッセージ
- 他社との明確な違いがどこかを積極的にアピール

<u>ある企業でのプレゼンコンテスト</u>

グループ　A　日本語　→　日本(人)語

グループ　B　日本語　→　英語(外国人)　→　日本(人)語

グループ　C　英語　→　英語(外国人)

◎マーケティング活動における勝者はどのグループだったか

All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

# ご参考
# アクティビストが好む銘柄とは

1. 資本市場との対話が少ない（ように見える）

2. ガバナンス報告書に透けて見える不真面目さ（all comply を評価しない）
   - 経営・取締役会で議論されていない（ことが判る）
   - 資本効率への意識が欠如（していることが判る）
   - 他力本願的（メインバンクが守ってくれると信じているように見える）
   - 他社よりは、マシだろうと信じている（取締役会評価における他社比較）

3. 中長期的な視点で経営をしていない（ように見える）

4. 取締役会のメンバーが形式的（過ぎるように見える）

All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

# 最大のアクティビストからの「防衛策」は資本市場との日常の対話

- 企業が投資家の賛同を得るポイント
  - 経営陣は日頃から株主の声に耳を傾けているか
  - 株主からの要求に対し、すでにアクションを取っているか
  - そのアクションにおける経営トップのコミットメントが十分にアピールできているか
  - 経営陣、および取締役会が資本市場から信頼を持たれているか

IR面談を通じた投資家のコメントにはアクティビスト防衛のヒントが満載

- 狙われやすい隙を作らない
  - 中長期運用の投資家で占められる株主構成
  - 資本構成、ガバナンス等の弱点を克服

自社を定量・客観視することが重要
- 脆弱性分析
- ガバナンスベンチマーク分析
- パーセプションスタディ

- 資本市場の動向に高いアンテナを
  - 定期的な株主判明調査、株主構成の把握
  - 投資家からのフィードバックを取締役会に定期報告
  - アクティビスト、機関投資家や議決権行使アドバイザーの動き
  - ESGのトレンド　等

All Rights Reserved © J-Eurus IR Co., Ltd.

# ご参考：弊社概要と略歴

J-Eurus IR Co., Ltd. © All Rights Reserved

# 会社概要

| | |
|---|---|
| 名　　称 | ジェイ・ユーラス・アイ・アール株式会社 |
| 設　　立 | 平成12年12月27日 |
| 所 在 地 | 〒100-0005　東京都千代田区丸の内3-3-1<br>新東京ビル6階<br>電話番号:03-6273-4032 |
| 主な役員構成 | 代表取締役　　田中 康雅<br>取締役会長　　岩田 宜子 |
| 社　　員　　数 | 18名（英米の2名を含む） |
| 主な子会社 | ボードルーム・レビュー・ジャパン株式会社 |
| リスク管理体制・<br>内部統制システム | Pマーク取得（8回更新） |

# 弊社の強みと実績

## ■ 業界のオピニオンリーダーとしての地位を確保

- ◆ 弊社代表の岩田は、先駆的かつ国内初となる様々なIR・ガバナンス関連プログラムを日本企業にご紹介し続けています
- ◆ 弊社マネージング・ディレクターの高山は、日本コーポレート・ガバナンス・ネットワーク理事、金融庁・東京証券取引所 「スチュワードシップ・コード及びコーポレートガバナンス・コードのフォローアップ会議」メンバー、経済産業省・東京証券取引所「なでしこ銘柄選定基準検討委員会」委員、経済産業省「コーポレート・ガバナンスの対話の在り方 分科会」委員等を拝命しています

## ■ 関連著作を多数出版

- ◆ 「スチュワードシップ・コードとコーポレートガバナンス・コード～日本企業への影響とIR活動～」（同友館　2014年11月）
- ◆ 「スチュワードシップとコーポレートガバナンス」（共著、東洋経済新報社 2015年1月 ）
- ◆ 「コーポレートガバナンス・コードのIR対応」（岩田、中央経済社　2015年11月）

上記の他、「商事法務」、日経新聞等にも取締役会評価関連の論文を多数掲載

# 略歴

## 岩田　宜子（いわた よしこ）

取締役　会長
ジェイ・ユーラス・アイアール株式会社

### 略歴

慶応義塾大学経済学部卒業後、米系銀行の東京支店に入社。外国為替、融資、さらにALM分析、リスク管理計画など多岐にわたる業務を経験の後、米系大手カード会社に入社。当カードの国内におけるシェア拡大、さらに世界に先駆けての国内決済センターの立ち上げ、ICカード実験に参加する。

1992年よりIR業界でのキャリアを開始、1994年12月米国IRコンサルティング会社、テクニメトリックス（現、トムソン・ファイナンシャル）の東京支社開設に伴い、同社に入社。市場を意識したIR活動を日本で初めて提案。同社を退社するまで、日本・韓国担当シニア・ディレクターを務めた。同社で担当した企業数は100社を越え、現在IR先進企業と呼ばれているほとんどの企業を顧客とした。

同社の日本企業チームの有志で、日系初のグローバル・IRコンサルティング会社、ジェイ・ユーラス・アイアール㈱を設立。今までの経験を活かし、日本に軸足を置いた本格的なIRコンサルティングビジネスを展開する。現在、上場企業はもちろん、新興企業、上場前企業を顧客とする。2007年より2011年まで東証上場会社表彰選定委員。2013年10月、経産省にて、「日本再興戦略-JAPAN is BACK-」における対内直接投資研究会を発足され、その委員に選ばれた。
2016年、京都大学にて博士号（経済学）取得。

ご参考：

日経新聞2020年6月1日より「人間発見」（5回掲載）、同「交遊抄」（2023年2月22日掲載）

### 主な掲載論文

「欧米に遅れる日本企業の資金調達」（ハーバード・ビジネス・レビュー92年11月）、「アナリスト評価機関の設立を」（1994年東洋経済別冊）、「日本企業によるIR活動の現状と今後の課題」（商事法務1996.11.25号）、「株価左右するIR活動－国際優良銘柄の条件に、株主総会対策で効果」（日経金融新聞1997年2月）、「日本における議決権行使システムの問題と改善提案」（商事法務2000.3.5号）、「アメリカ最新事情に見る総会の役割」（週刊東洋経済「経営革新入門」2000.6.10/6.17号）、「新世紀マネージメント-市場に真摯なIR、情報開示ポリシー作りの3原則」（日経ビジネス2000.11.6号）など。日本インベスター・リレーションズ協会による刊行誌に「パワーアップする日本の経営陣」、「西暦2000年のIR」、「IT時代を意識する米国」などを掲載。

2001年1月 東洋経済新報社より近藤一仁氏との共著で「投資家・アナリストの共感をよぶIR」を出版。また、2001年後半、日本証券新聞にて「IRの現場から」、東証マザーズメールマガジンにて「IR基礎編」を担当。。2010年8月 日経新聞「目からうろこ」シリーズ「企業統治開示の新潮流」8回執筆、2011年8月 日経新聞「なるほど投資講座」シリーズ「企業統治開示の最新事情」4回執筆。2013年12月同友館「ファンドマネージメント大全～資産運用会社の経営と実務～」のIRのパートを執筆。2014年12月、同友館より「スチュワードシップ・コードとコーポレートガバナンス・コード～日本企業への影響とIR活動～」を代表執筆。2015年11月「コーポレートガバナンス・コードのIR対応」（中央経済社）出版。2017年12月商事法務「取締役会評価の現状分析と今後の課題」（共著）。2019年7月商事法務「取締役会のあり方に関する近時の議論と企業の対応―取締役会の実効性評価により抽出される課題と対応―」（共著）。2019年11月商事法務「取締役会評価の現状分析と今後の課題」（共著）続いて、2021年5月商事法務「取締役会評価の現状分析と今後の課題」（共著）を発表。9月15日号にて「投資家によるエンゲージメント要請への応え方」を執筆。その他、論文多数。

2023年4月1日現在